ARTIST Talk

YAMASHITA YOSUKE

山下洋輔

ジャズ・ピアニスト

僕のことを“面白い奴”という風に見てくれる人がたくさんいた

稀代のジャズ・ピアニスト、山下洋輔さんの奏でる奇想天外な創造世界は半世紀近くの間、世間を驚かせてきた。幼い頃から転々と居を移してきた彼にとって、世田谷区立東大原小学校（現・下北沢小学校）は人生初の母校。現在、同校の名誉同窓会員でもある山下さんにお話を伺った。

戦争の記憶と淡い初恋

――東大原小学校での思い出は？

実際は1年生の間しか通ってないんですよ。生まれは渋谷・金王町なんですが、間もなく代田橋に引っ越し、空襲のため3歳で長野県・下伊那郡へ疎開。その後、運よく焼け落ちずに残った代田橋の我が家へ舞い戻り、近所だった東大原小学校へ通うことになりました。ちなみに、当時担任だった須田先生が僕の初恋かな（笑）。

――母校の同窓会で演奏することになったのはどういった経緯で？

当時の話をエッセイに書いていたら、それを目にした同級生が数年前「創立記念に出てほしい」と連絡をくれて。おかげでご縁が復活したというわけです。4月に行う演奏で2回目の出演。須田先生にはお会いできておりませんが。

――住んでいた世田谷の地にまつわる記憶はありますか？

代田橋にいた頃はよく外で友達と遊んでいました。3歳で体験した戦争の記憶も所々残っています。山手に焼夷弾が落っこちてきて、代田橋の水道局にあった防空壕へ母親と避難したんです。周りの電柱が全部燃え上がっていて辺り一面火事。これが人生最初の鮮明な記憶ですね。火の色とか周りにいた大人の声とか、今でもはっきりと覚えています。その後疎開先で終戦を迎えたんですが、戻ってきた代田橋の家には母親の嫁入り道具だったピアノが残っていて、これこそが後に私の人生を左右するものになります。

人生初のステージで披露したのはヴァイオリン

――幼少期からピアノに親しんでいたようですが。

兄弟たちの証言によると、よちよち歩きの頃からピアノを触っていたようです。手でバーンと鍵盤を鳴らしてね。どんな音が出ようと嬉しそうにしていたらしいですよ。

――今やられているフリージャズの原点ですね（笑）。しかし、幼少期にはピアノではなく、ヴァイオリンを習っていたそうですが？

母親がピアノ教師だったので家でバイエルなんかを生徒に教えていたんですが、僕はそれを耳で聴いて何となく弾けていたんです。喜んだ母親が楽譜を渡して練習するよう促してくれたんですけど、僕はそれを断固拒否。耳で聴こえるものを楽しく弾きたい、勉強になってしまっては面白くないと考えたんでしょう。ある意味クラシック・ピアノではなくジャズ・ピアノを選んだ出発点は代田橋の家かもしれません（笑）。しかしどうしても諦めきれなかった母親が、今度はヴァイオリンを薦めてきてね。その申し出をなぜ素直に受け入れたのかは今だにわからないけど、結局僕はその後、父親の転勤先であった福岡県・田川市でヴァイオリンを習い、父親の会社が主催するオーケストラの発表会に参加させられることになるんです。思えばこれが人前で披露した最初の舞台。意外にもピアノではなかったんです。しかしヴァイオリンはピアノと逆で、楽譜を見ないと一切弾けませんでした。僕にとってこの2つは全くの別物という感覚だったんです。

引っ越しと転校続き、気持ちはまるで異邦人

――山下さんは幼少期から中学までの間、引っ越しと転校を繰り返していますよね。

東大原小学校から三鷹の小学校を経て、田川へ引っ越し。一番長かったのは中学2年生までいた田川だったので、すっかり田川弁が身についてしまい、再び東京へ戻ってきた時には方言を周りに笑われました。

中学2年まで定住地がありませんでしたね。田川に行くまで自分は東京の人間だと思っていたけど、いざ東京に戻ってきたら田舎者扱い。故郷をなくした異邦人のように感じました。でもきっとそうして、異国文化に触れるスリルや理解した時の喜びを覚えたんでしょう。だからジャズをやっているのかもしれません、こじつけだけど（笑）。知らないものに触れて驚いて、それを理解しようとする。それって外国の音楽であるジャズに触れた時も同じなんです。転々とした生活の中で、そういう思想が育まれたんじゃないかな。

中学3年生、兄の影響でジャズに傾倒

大学生の兄がよく友達を集めてうちでバンド練習をして

いたんですよ。で、そのうち「お前もピアノで入ってみろ」と。例によって耳で音を探り何とかついていくんですが、途中で複雑な和音が出てくるんです。不思議そうにしていると、ギターの人が「こういう風に弾け」って教えてくれて、そこで初めてコードを知りました。興奮しましたね。その時弾いていたのは、忘れもしない「On the Sunny Side of the Street」という曲。それ以降は熱心にコードを勉強しました。新たな知識を得られたことがとても嬉しかった。

――そこから一気にジャズへ傾倒していくと。

当時通っていた麻布高校で１年の時に、周りの連中に声をかけて僕以外にクラリネット、ドラム、ベースを集め、文化祭で初めてジャズのライブをやりました。これが意外にも、生徒だけじゃなく先生たちの評判も良くて。麻布高校の卒業生には、フランキー堺さんや小沢昭一さんといった大御所がいるんですが、こんなに生徒を大騒ぎさせたのは彼ら以来のことだって、先生も喜んでくれたんです。特に当時の担任は僕を面白がりました。放課後渋谷のジャズ喫茶へ行き、音楽の話をたくさんしましたね。進学相談で国立（くにたち）音大へ行けと薦めてくれたのもその先生。国立音大の作曲科に進学することにしました。

――高校在学中に担任とジャズ喫茶へ、というのは今の時代では考えられないですね。

そうですね（笑）。大きくなってからもいろいろなジャズ喫茶へ行きました。下北沢の「ジャズ喫茶マサコ」（※取材場所である「はやし」の店主は「マサコ」の元店員）なんかもそのひとつです。

――高校在学中にプロになったとお伺いしましたが？

高校３年になった頃、僕の評判を聞いた方からのスカウトを機に、２年間位はプロとして活動しました。当時は米軍基地での仕事もあって、電話１本で呼び出されいろいろな現場へ出向いて演奏したものです。戦後独特の昭和文化が香る楽しい時代でした。

幸運な出会いの数々が紡いだ山下洋輔ワールド

その後入学した国立音大でも、理解ある先生方と出会うことができました。今思うと“変な奴でも許してくれる”方々に要所要所で巡り合っていて、そのおかげで生きてこられた気がします。クラシックの理論を知らずにジャズをやってもどこかで行き詰まっていたはずなので、音大で学べたことも僕にとっては大きかった。

――いろいろな場面と環境の中で幸運な出会いをなさってきたんですね。

僕のことを“面白い奴”という風に見てくれる人がたくさんいた、というのがまさに幸運。フリージャズは無茶苦茶にしか聴こえない音楽で、世間的には理解され辛かったので、最初はジャズではなくフォークやロックの世界に紛れ込んでいましたが、そこでも“ちょっと普通じゃない”ことが面白がられたものです。また、以前発表した『ドバラダ門』という本に、曽祖父が西郷隆盛と所縁（ゆかり）があったことを書いたんですが、そのご縁で最近は、NHK大河ドラマ『西郷どん』に出演することもできました（笑）。ピアノを譜面で弾くのを断って耳で弾いたこと、ジャズと出会ったこと、字を書いたこと、それらが全部錯綜して今の自分になっていると言えます。

PROFILE

山下洋輔
Yamashita Yosuke

1969年、山下洋輔トリオを結成、フリー・フォームのエネルギッシュな演奏でジャズ界に大きな衝撃を与える。国内外の一流ジャズ・アーティストとはもとより、和太鼓やシンフォニー・オーケストラとの共演など活動の幅を広げる。99年芸術選奨文部大臣賞、03年紫綬褒章、12年旭日小綬章を受章。国立音楽大学招聘教授。

山下洋輔スペシャル・ビッグバンド・コンサート 2018
2018年7月13日（金）18:30　サントリーホール
S 7,000円　A 6,000円（全席指定、当日券は¥500増）
お問合せ：ジャムライス 03-3478-0331 www.jamrice.co.jp/

取材・文：濱安紹子／撮影：末武和人
取材協力：ジャズと喫茶 囃子　はやし
〒155-0031　世田谷区北沢 2-9-22 EIKOビル 3F
tel: 03-5738-7107（火・水 定休）営業時間 15:00 ～ 24:00